

## 原爆音楽の軌跡

### 第五期（1986～1995）

被爆40周年には内外で大きな音楽的催しが目立ったが、その後も国際化の傾向はますます加速する。前の時期と違う点は、被爆という問題が広島や長崎の特殊現象としてだけでなく、人類共通の問題として認識され始めたことである。その背景には、1986年のチェルノブイリ原発事故などがあって、より身近なところで生命の危険を再認識させられたことも否定できない。音楽でも、広島という壁を越えた幅広い国際的な広がりを見ることができると。93年には、ロシアからキリーロビッチが民族楽器バヤーンを携えて、広響の「平和コンサート」に登場した。協演した曲目はダニーロビッチが87年、原発事故と人間の闘いをテーマにして作曲した《シンフォニー・ロブスター》で、ヒロシマの願いをはっきりと確かめることのできる意義深いコンサートであったといえよう。佐々木貞子さんを悼む哀歌〈エレジー・サダコ〉がロシアと日本の合作で作られたのも興味深い。

この時期には、地元のオーケストラ広島交響楽団の活躍が目立っている。91年にはウィーン公演が実現し、中国地方唯一のプロ・オーケストラとして足場を確かなものにしていく。翌年にはポーランドの作曲家ペンデレツキが来広し、広島交響楽団を相手に自作の〈ヒロシマの犠牲者への哀歌〉を指揮している。また、ナチスの犠牲になった少女を歌い一躍名をはせたポーランドの作曲家ヘンリク・グレツキの交響曲第三番《悲歌のシンフォニー》の広島初演を果たしたのも広島交響楽団である。この広響定期にはチャイコフスキーの交響曲第三番《ポーランド》も演奏され、愛と平和をテーマにしたコンサートの締め括りに相応しいものであった。

地元オーケストラの活動に象徴されるように、この時期の国際化では、広島の演奏団体の海外進出が目立っている。崇徳高校グreekクラブは、米国、ニューヨーク市にあるカーネギーホールで公演を行い、峠三吉の詩による〈ヒロシマ〉などを演奏して、平和のメッセージを歌で伝える役割を果たした。

この時期に広島を訪れた音楽家たちに、ヒロシマを意識した曲目や発言が相次いできたのも大きな特色である。フランスの代表的なシャンソン歌手ジャクリーヌ・ダノはレパートリーに〈ヒロシマ〉を入れているし、指揮者シノポリは、公演を前にして「音楽は文化であり、文化の創造というのは、人間が存在する理由について考え続けることだ」と述べている（中国新聞、88年10月1日）。

この時期にもかなりの原爆作品が作曲されている。遠藤雅夫の合唱組曲《石の焰》、細川俊夫の《ヒロシマ・レクイエム》、林光の《生命の木、空へ》、フランス人フェリエ・ジョルダンの《レクイエム（嵐）》、地元からは小玉好行の《撫子》などがある。小玉好行の作品は、疎開先の子どもと親との手紙のやりとりで構成され、当時の状況を知る貴重なドキュメントとしての価値も持っている。

### 参考文献

- ・ 原爆被災資料広島研究会『原爆被災資料総目録』第二集 原爆被災資料広島研究会 1960年
- ・ 中国新聞社編『年表 ヒロシマ～核時代五十年の記録～』メディア開発局出版部 1995年
- ・ 『中国新聞項目別記事索引』昭和49年7月～平成10年7月 中国新聞社

(原田宏司・広島大学名誉教授)